

一 法華經の行者に水火の行者の事

仰せに云はく、総じて此の經を信じ奉る人に水火の不同有り。其の故は火の如きの行者は多く、水の如きの行者は希^{まれ}なり。火の如しとは、此の經のいわれを聞いて火炎のもえ立つが如く、貴く殊勝に思ひて信^{ども}ずれ共、驢^{やが}て消え失ふ。此は当座は大信心と見えたり共、其の信心の^{ともしび}灯消ゆる事やすし。さて水の如きの行者と申すは、水は昼夜不退に流るゝなり。少しもやむ事なし。其^その如く法華經を信ずるを水の行者とは申すなり。